

鬼畜輪姦催眠シリーズその1

沈黙の処女喪失



名前：磯山陽子

年齢：18

職業：藤山女子高等学校3年生（生徒会長）

経験：処女（催眠強制フェラ経験あり）

性器：びらびらの小さい美マンタイプ

備考：（そこそこ）いいところのお嬢様



鬼畜輪姦催眠シリーズ1

沈黙の処女喪失

第1話 選ばれてしまった4人



第1話・選ばれてしまった4人

ふと、目を覚ますと、そこは見覚えのない部屋だった。

由佳里は、ソファアに座っていた。マンションの一室、おそらくはリビングルームだ。由佳里は、なぜ自分がここにいるのか思い出せなかった。

夢だろうか。きよとんとして周囲を見回すと、左に2人、女性が座っていた。由佳里と同じように、不思議そうな顔でキョロキョロとあたりを見回している。

セーラー服の女の子と、ラフな格好の女性。2人とも飛び抜けて美人だった。

「はい、皆さん、おはようございます！」

由佳里たちの正面にもソファアがあって、そこに座っていた20代の男が言った。

男は、バインダーとペンを手にして、何かさらさらとメモしていた。いったいこれは何だろう。夢でも見ているのだろうかと由佳里は思った。とにかく唐突で、何が起こっているのか理解できなかった。寝起きみたいに頭がぼんやりしていた。時計が12時を指して

いて、外は明るいので、昼間だということは分かった。

「えーっ、私、玉川と申します。以後、よろしくお願いします。玉ちゃんと呼んでいただければけっこうです」

男が言って、由佳里は玉川を見た。

特徴のない中肉中背。風呂あがりなのか、真っ白なバスローブを着ていて、短い髪が少し濡れていた。ぱつと見は、なかなか二枚目だった。

「では、こちらの方から、氏名、職業、年齢、経験人数、おっぱいのカップ数を。性癖とか好きな体位とか性感帯があったら、それもお願ひいたします」

この人は何を言っているんだろう。そう思った瞬間、

「翠川由佳里、看護師、23歳です」

口が勝手に動いて、由佳里は仰天した。

何が起こっているのか、まるで分からなかった。悲鳴を上げて逃げ出そうとしたが、そこで、声も出せず下半身がまったく動かないことに気が付いた。許されているのは、呼吸とまばたき、それと上半身の動きだけだった。

「けっ、経験人数は3人。胸はFカップです。キスしながら、びったりくっついて、ぎ、座位であるのが大好きです」

顔が真っ赤になるのが分かった。言いたくないのに、聞かれたくないのに、口がすらすらと勝手にしゃべっていた。真夏の夜に見る悪夢のようだった。

「3人は、みんな彼氏？」

「は、はい。彼氏です」

「付き合ってから、どのくらいでセックスを許しますか。あと、フェラとかパイズリとかアナルとかSMとか、そういうプレイの経験はありますか」

「せ、セックスはだいたい、付き合い始めて1カ月くらいたってから許します。フェ、フェラとパイズリはありますが、ほかは特にありません」

失神しそうになる。パイズリなんて単語を口にしたのは、23年の人生で初めてのことだった。

「ほうほう。じゃあ、意外と慎重なんだね？」

「はい。そ、そう思います」

「今現在、彼氏は？」

「い、います」

「セックスは、どのくらいの頻度ですか」

「しゅ、週に多くても2回くらいです」

「多くても、か。もったいないねえ。セックスは好きですか？」

「は、はい。大好きです」

嫌だ。そんなこと言わせないでと思ったが、玉川はニコニコと続けた。

「毎日でもしたい？」

「ま、毎日でもしたいです」

「いったことある？」

「た、たぶんありません」

「ふーん。じゃあ、僕が毎日たっぷりセックスして、どんどんイかせてあげるからね！」

夢？これはやっぱり悪夢？

手を懸命に伸ばして、由佳里は隣の子に助けを求めた。そこでや

つと、自分が自前のナース服を着ていることに気が付いた。いったいどうなっているのかさっぱり分からなかった。

「…っ、…っ！」

隣の女の子はセーラー服を着ていて、すがりつくように由佳里の手を握った。ぱくぱくと口が動いているが、声が出ていない。泣きそうな顔で彼女は首を振った。

彼女も、同じらしい。何もしゃべれないし、下半身がまったく動かないのだ。

「では、次の子」

促されて、その子が口を開いた。

「鈴木亜矢、こ、高校3年生です。しよ、処女です。ぶ、ブラのサイズはDカップです。せ、性癖とかは分かりません」

亜矢は今にも泣きだしそうだった。

女性の由佳里から見ても、ものすごく可愛い、ショートカットの女子高生だった。元気があって明るくて、友達もいっぱいいな女の子だ。

「…っ！」

はっと気付いて、亜矢は口を手でふさごうとした。しかし、いい

アイデアだと思ったのに、なぜか、亜矢の両手は顔の10センチぐらい前で止まって口をふさぐことはできなかった。じたばたする亜矢を見て、玉川はハハハと笑った。

「無駄だからおやめなさい。キスは？」

玉川の言葉に、亜矢は上半身をくねらせたが、無駄だった。

「き、キスも、まだです」

「ふうん。可愛いのにね。彼氏がいたことない？」

「か、彼氏がいたことはありません」

「ええと、経験は全然ないみたいだけど、女の子同士でエッチの話をしたり、友達の体験談を聞いたり、エロ本とかアダルトビデオを見たりしたことは？」

「な、仲のいい子はみんな処女なので、あまりそういう話はしませんが。彼氏がほしいねっていう話はよくします。エ、エッチなビデオを見たことはありません。本は、男子のをちらっと見ました」

女子高生の赤裸々な告白。亜矢の顔は真っ赤だった。

「その、処女の友達に、かわいい子いる？」

「は、はい。かわいい子はたくさんいます」

「うん、それは楽しみだ。オナニーしたことは？」

「ほ、本格的にしたことは、ありません」

「見かけによらずウブなんだねえ。セックスしてみたい？」

「は、はい。いつか、してみたいです」

「お友達と3Pとか4Pとか、興味ある？」

「な、ないです」

「そっか。でもあとで、お友達と一緒にオマンコずぼずぼしてあげるからね！」

玉川が言って、真っ赤だった亜矢の顔が真っ青になった。ぶるぶる震えていたが、玉川はかまわずに続けた。

「では最後、皆さんご存じの方です。僕も大ファン！」

そして、一番向こうにいた女性が口を開いた。

「は、葉山カオリ、女優、25歳です。し、処女です。胸はEカップです。私も性癖とかは分かりません」

それで、由佳里もやっと気付いた。あの、葉山カオリだ。日本人で初めてアカデミー賞の主演女優賞に輝いた、今、日本でナンバーワンの女優だ。

その国民的美人女優が、由佳里のすぐそばで、怯えた表情で震えていた。何が起こっているのか分からず、彼女もパニックに陥っているようだった。

しゅっと細長の目が、大きく見開かれて、セクシーな唇がかすかに震えていた。

「ほう！カオリちゃん、25歳なのにまだ処女なんだ！」

「は、はい」

「まさか、キスもまだとか言わないよね？」

「キ、キスもまだです」

カオリの告白に、その場にいた全員が驚いた。特に玉川は飛び上がらんばかりに驚いて、それからぱちぱちと拍手をした。

「そりゃ素晴らしい！じゃあ、彼氏がいたこともない？」

「は、はい」

「まさにきれいな身体なんだね！でも、デートに誘われたり、告白

されたりしないの？」

「しょ、食事に誘われることはけっこうありますが、マネージャー同席か、共通の友人が一緒じゃない限り断ります。こ、告白は、小學生のときに一度だけされました」

「ガードが固いのかなあ。彼氏がほしい？」

「ほ、欲しいです」

「エッチな本とかビデオ見たりとかは？それで、オナニーしたことはある？」

「え、エッチな本は見たことはありません。エッチなビデオは、ネットによく見ます。お、オナニーは、ビデオを見ながら何度か試してみたことがあります」

普通なら絶対に知りえない、国民的女優の恥部。カオリの顔は真っ青で、失神してしまうのではないかと思ったが、玉川はすっかり興奮していた。

「オナニーは気持ちいい？」

「いえ、あまり…」

「そうかあ。セックスしてみたい？」

「は、はい。なるべく早く、してみたいです」

「ちよっと焦ってるのかな？」

「は、はい」

「そっかそっか。心配しなくても、僕がカオリちゃんの処女もらってあげるからね。オマンコにずっぱり、硬くてふつといの入れてあげるから！」

心底、玉川は楽しそうに言うと、バインダーにペンをはさみ、ぽんとテーブルにほうり投げた。衝撃でペンが外れて、テーブルの上をころころ転がっていった。現実感がなく、由佳里は茫然とその転がりゆくペンを見ていた。

まるで、自分の未来のようだと思った。

「はい。じゃあ皆さん、今から、おっぱいもみながら大事な説明をしますから、逆らわずに聞いてくださいね」

そう言つて、玉川は立ち上がると、ゆっくりと背後に回り、手を伸ばして由佳里の胸をつかんできた。

何とか逃げようとしたが、由佳里は動けなかった。首だけしか動かすことができない。きつと、真つ青な顔をしていただろう。ぐいっと乳房を握られて、すごく痛かったが声を上げることはできなかった。何か悪い夢でも見ているに違いないと思つたが、玉川の手の

感触は、リアルだった。

「えーっ。身を持って分かっているかと思いますが、皆さんは催眠術にかかっている、僕の命令には絶対に逆らえません」

玉川は隣に移動して、今度は亜矢の胸を撫でた。亜矢の顔も真っ青だった。

「多分、想像はついていると思いますが、今日から皆さん、僕の肉奴隷です。ほかの男との性交渉は禁止します。キスも駄目。指一本触れさせちゃ駄目ですからね！」

そして、葉山カオリの後ろにいつて、玉川は胸を撫でた。

美人女優のカオリは脅えた表情で、自分の胸を撫でる玉川の手を仰視していた。反対の手が、ずぼっと股間に差し込まれる。おそらくどこか大事な部分を触られたのだろう、一瞬、カオリの上半身がびくんと震えた。

「えーっ、申し訳ないですがあ、今から皆さんに、中出しレイプしちゃおうと思います」

やはりというか、玉川はそう言った。

「ときどき呼び出して、ばんばん中出ししちゃいます。もちろんそんなことしたら、大抵、妊娠しちゃうと思いますので、妊娠したくない方はピルを飲むなり何なりして、ご自身で対処・防御してください」

さいね。妊娠したらもう呼び出しませんので、犯されたくない方はわざと妊娠しちゃうのもいいかもね！」

カオリのうなじを舐め、耳をかじり、乳首を軽くつまんでから3人の前に周り、玉川はにこりとほほ笑んだ。

「あるいは、自分の代わりに美人を一人、連れてきてください。亜矢ちゃんみたいな可愛いタイプでもいいですよ。そうしたら解放します。はい、分かりましたかあ。カオリさん、ルールを3つ、復唱してください！」

「ほ、ほかの男性との性交渉禁止。に、妊娠したら終了。自分の代わりを差し出したら終了…」

「はい、よくできました。それでは皆さん、中出しレイプしますのぞこちらにどうぞ！」

言いながら、玉川はリビングの奥に向かい、ドアを開けた。

勝手に身体が動き、由佳里たちは恐怖の表情で玉川を追った。中は寝室になっていて、同時に5、6人は寝れそうな超キングサイズのベッドが置かれていた。ガラス張りのバスルームがあり、天井からぶら下がっている鎖もあり、三角木馬みたいなものもあり、さながらラブホテルかブレイルームといったところだった。

そして、ベッドの上に、ブレザー姿の女子高生が脅えた顔で腰かけていた。亜矢が明るく可愛い女子高生だとすると、その子は清楚で正当派美人の女子高生といった感じだった。

「えーっ、こちらは、皆さんの先輩になります。名門、藤山女子校の3年生、みんなの憧れの生徒会長、磯山陽子ちゃんです。まあ先輩といっても、昨日捕まえたばかりのぴちぴちの処女です。皆さんどうかよろしくお願いしますね」

長い髪が腰まで届いていて、これも素晴らしく美人だった。

高校生とは思えないほどの性的魅力と、いかにも高校生らしさが混然いったいと同居していて、今にも泣きだしそうな表情で3人を見ていた。助けを求めているように見えたが、由佳里には何もできなかつた。

「では、順番ですから、今日はまず、この陽子ちゃんの処女をいただきますと思います！」

心底、うれしそうに玉川は笑った。

そして、服を脱いで全裸になり、どすりと陽子の隣に座った。肉棒が既にぐつと上を向いていた。凌辱劇の、始まりだった。

第2話 沈黙の処女喪失



第2話・沈黙の破瓜

全裸で、陽子の隣に座ると。玉川は突然、その唇を奪った。

「ひっ…」

逆らえないのか、陽子は嫌そうに顔をしかめて目をつぶり、玉川のなすがままになっていた。べろべろと、舌と舌が絡んでいやらしかった。かわいそうだったが同情している余裕はなくて、自分もこんな姿になってしまうのかと、由佳里は恐怖した。

「いや、本当は昨日、レイプしようと思って、とりあえずフェラしてもらったんですけどね」

唇を離し、3人を見て玉川は言った。

「お恥ずかしい、陽子ちゃんがあまりに魅力的なので、フェラだけで出しちゃいました。それで満足しちゃったので、陽子ちゃんはまだ処女を守ってるってわけ。アハハハ」

むろん、笑ったのは玉川だけだった。

「陽子ちゃん、今日もフェラチオする？」

玉川の言葉に、陽子は真っ青な顔で首を振った。

黒い髪が揺れる。その髪を手にとつて、玉川がくんくんと匂いかいだ。それからばさりと肩の後ろに髪をやつて、あらわになった首元を舐めた。陽子は反対を向いて、目をぎゅっと閉じて我慢していた。

「それなら、普通に、セックスしようか」

そう言われて、陽子は慌てて首を振った。

「ひっ、しっ、フェラしますっ！」

初めて聞く、陽子のか細い声。かわいそうに、脅えていた。

「ん？舐めたいの？」

「な、舐めたいです…」

無理やり言わせたくせに、玉川は満足気な表情だった。

「そこまで言うなら、してもらおうかな。準備はいい？」

「は、はい…」

陽子が、ごそごそと移動する。本当に、するようだった。

「あの時計で9時14分まで、10分間。いくよ。よい、ドン！」

合図をすると、陽子は玉川の股間に顔を埋めた。

「んくうっ」

ペニスをくわえて、陽子が声を漏らした。

左右に細かく陽子の頭が動き、ペチャペチャと卑猥な音が聞こえてくる。清楚な女子高生が、名門女子高の生徒会長が、人前でフェラチオをしている。それに興奮しているのか、玉川は早くも息を弾ませていた。

「こつちに。見て」

玉川が指で合図して、由佳里たちはそれがよく見える場所に移動させられた。

玉川が陽子の髪をかき上げると、ピンク色の薄い唇に飲み込まれるグロテスクな塊が、はっきり見えた。

「んっ、くちゅっ、んぶっ…」

陽子の呼吸が、玉川の肉棒にふうふうとかかっている。上品に手

をそえて、熱いアイスクリームを舐めるように、陽子がペニス舐めていた。テクニク云々というより、このシチュエーションが玉川を興奮させているようで、既に肉棒はカチカチになって不気味に光っていた。

「陽子ちゃんは、わりといいところのお嬢様だそうです」

聞かれてもないのに、玉川は説明した。

「今は、藤山女子高校の生徒会長。スポーツはあまり得意じゃないけど、昔、クラシックバレエをやっていたそうです。ヴァイオリンとフルートも得意だそうですよ。清楚な美人の女子高生っていいですよええ。こんな子をレイプできるなんて」

興奮したのか、びくつとペニスが震えた。あるいは陽子が震えたのかもしれない。

「ちゆるっ、んぶっ、じゆるっ、じゅうっ、じゆるるっ…」

陽子は音を立ててペニスを吸った。

手で裏筋を撫でながら、亀頭を舐め回す。裏まで舐めてはくんとくわえ、またのどの奥まで飲み込む。それを吐き出すと今度は手でごしごし擦る。処女だということだが、初心者わりには慣れた手つきだった。柔らかく男性器を擦りながら、陽子は上目遣いに玉川を見た。

「じゅ、10分を過ぎると、どうなるんですか…?」

陽子の怯えた声に、玉川はニコリと笑った。

「それまでに射精しなかったら、レイプするってこと」

「ひっ…」

陽子の血の気が引いていくのが分かった。この状況で、フェラチオだけで済むと思っっているのが、お嬢様らしかった。

「あと8分！」

陽子は急に慌てだした。

ちゅっちゅっちゅつと、まるで自分の子どもにするかのように亀頭にキスをする。ぺろぺろと舐めて浅く何度も動かす。それから一生懸命、ごしごしと両手で擦ったが、まだまだ玉川は平気なようだった。

「んぶっ、んぶっ、んぶっ、んぶっ」

陽子は必死に頭を上下させた。口の中にたまったつばをペニスに吐き出し、それを細い指に塗って、搾り出すようにえいやえいやと擦っていった。搾りながら、舐めた。

「んちゅっ、れろっ、んんっ、ちゅぶっ、ちゅぱっ、ぶはあっ」

だが、一向に射精の気配はなかった。牛の乳搾りでも思い出したのか、小指のほうから順番にぐいぐいと握ったりした。しかしそれでもペニスの先からミルクは出なかった。

どうすればいいのか分からなくなったのか、ぎゅうつと思いつかんでみたりもした。

そのまま、そのまま動かせばいいと、由佳里は心の中でアドバイスした。それが通じたのか、ぎゅうつとペニスをつかんだまま、陽子は上下に手を動かし始めた。

「お、いいね。あと5分」

玉川が言って、陽子はぎゅうつと指に力を入れた。片手では弱いと感じたが、もう片方の手もそえた。両手でぎゅうつと握ってえいえいと動かして、先のほうをひたすら舌で舐めた。

「んっ、んぶっ、ちゅぶっ、ちゅぶうっ」

陽子の真つ赤な舌が口元でチロチロと動いていった。いい感じに見えたが、時間があまりなかった。

「ちゅぶっ、ちゅばっ、ちゅぶっ、ちゅばっ、ちゅばあっ」

最後はもう、のどの奥まで入れてペニスを吸い上げた。

自分のことのようににはらはらして、由佳里は何度も何度も柱時計を見た。刻一刻と、制限時間が近付いてくる。陽子が必死に肉棒か

らザーメンを搾り取る様子を、髪を撫でながら、玉川がニコニコと見ていた。サディストだと思った。

「はい、1分前」

カウントに、陽子は必死に手を動かした。

「んちゅっ！じゅるっ！じゅるっ！ずじゅっ！じゅるううっ！」

玉川のペニスをくわえて、精液を吸い出そうと必死の形相で前後に動かす。そして口を離し、両手でごしごしと擦った。ものすごい勢いで擦っていった。

「お願い、出て、出て、出して…」

陽子は泣きそうな顔で訴えた。

しかし射精までには至らず、無常にも時計の針はどんどん進んでいって、ついに、制限時間を過ぎてしまった。

「はいっ、しゅーりょーっ！」

そして…、玉川が告げた。

これで、陽子の処女中出し生レイプは確定した。心底、玉川はうれしそうに、まだ股間に顔を埋めている陽子の髪を撫でた。陽子はびくっと震えて顔を上げた。

「はい、じゃあ陽子ちゃん、処女をいただきます」

「いっ、いやっ、いやあああっ！」

「あ、うるさいから大声は禁止ね。大人しくベッドに横になってM字開脚して」

命じられて、陽子の悲鳴が途切れた。そして、自分の意思に反して指示通りの体勢をとってしまう。逆らえないのだ。

「や、やめてください…」

小さな声で抗議する陽子を無視して、玉川は一つずつ丁寧にブラザーのボタンを外していった。あらわになった色白の胸元を指の腹で軽く撫で、下着の上からさわさわと乳房に触れる。

「う…、うう…、やだ…、助けて…」

そして、脇の下から手を入れて、慣れた手つきでブラジャーを外すと、形のいい胸とピンク色の乳首がぼろんとこぼれた。

「うーん。きれいなおっぱいだねえ」

玉川が、感嘆の声を挙げる。つつくようにして軽く触れると、ぶるんと揺れた。混じりけのない天然ものだった。

玉川が顔を近付けて、いきなりぺろりと表面を舐める。それから

乳首をちゅうちゅうと吸って、乳輪の周りを舌でなぞった。眉をしかめ目を閉じて、陽子はなすがままになっていた。両手でぐつと陽子の腰のあたりをつかむと、玉川は何度かゆさゆさと陽子の軀を揺らした。胸がふるんと震えた。若く、健康的な肉体だ。

「オマンコ犯しまくってるとき。こう、制服がだんだん落ちてくるんだよね。それを防ぐのにこの強力クリップが便利！」

「い、いや、助けて…」

「陽子ちゃんも、どうせなら、エッチしてるときにきれいなおっぱい見てもらいたいでしょ？」

「そんなの…、嫌です…」

「じゃあ、次はオマンコ見てみようか！」

「嫌…」

小さく、しくしくと陽子が泣いたが、玉川はお構いなしだった。下半身に移動し、無造作にスカートをめくると、しゅるりとパンティーを脱がす。そして、ずり落ちていたハイソックスを太ももの上まで持ち上げると、白く柔らかい太ももを、まるで宝物を愛でるかのように撫で回した。

「いや、いや…、やめて…、お願いします、やめてください…」